

藤村とルソー

——「サヴォワの助任司祭の信仰告白」読解余説——

今野 一雄

一

藤村の感想集『飯倉だより』(一九二二)をあけてみる
と、次のような文句が扉のことばとして冒頭に掲げられ
ている。

Je n'ai qu'à me consulter sur ce que je veux faire:
tout ce que je sens être bien est bien, tout ce que je sens
être mal est mal: le meilleur des casuistes est la con-
science.

……La conscience ne trompe jamais, elle est le vrai
guide de l'homme; elle est à l'âme ce que l'instinct est
au corps; qui la suit obéit à la nature et ne craint point
de ségarer.

……Conscience ! conscience ! l'instinct divin ; immortelle
et céleste voix ; guide assuré d'un être ignorant et borné,
mais intelligent et libre ; juge infailible du bien et du
mal, qui rend l'homme semblable à Dieu.

Jean-Jacques ROUSSEAU
(*Profession de foi de Vicaire Savoyard*)

藤村は原文を掲げているだけなので、この断片の意味
をみるしてみるなら、だいたいこんなことになる。

わたしは自分がしたいと思っ
ていることについて自分の
心にきいてみるだけでいい。
わたしがよいと感じること
とはみなよいことなのだ。悪
いと感じることはみな悪い

ことなのだ。いちばんすぐれた決疑論者は良心なのだ。

……良心はけっしてだますようなことはしない。良心こそ人間のほんとうの案内者だ。魂にたいする良心は、肉体にたいする本能のようなものだ。良心に従う者は自然に従い、けっして道に迷う心配はない。

……良心！ 良心！ 神聖な本能、滅びることなき天上の声、無知無能ではあるが、知性をもつ自由な存在の確実な案内者、善悪の誤ることなき判定者、人間を神と同じような者にしてくれるもの。

ジャン・ジャック・ルソー

(サヴォワの助任司祭の信仰告白)

この断片について、藤村は、なんら注解めいたことはしるしていない。『飯倉だより』に収められた感想を読んでみても、ほかの著作をあけてみても、とくにこの断片について言及してはいないようである。だから、藤村がどんなつもりでこのルソーのことばを引用したか、直接にはそれを知るなんの手がかりもない。もちろん、それほど深い意味はなくても、折りにふれて感銘をうけた古人のことばを、自分の著作の初めに掲げるといふこと

はある。だが、この場合、ルソーのことばには、なにかしらもっと重みがあるように感じられる。藤村がルソーについて語っているいくつかの短い文章に照らして想像してみるよりほかにしかたないことであるが、わたくしはここに雑駁な考えをしるしてみた。

二

初めに瑣末なことをとりあげてみる。

「サヴォワの助任司祭の信仰告白」は『エミール』の第四篇に織りこまれた哲学論・宗教論であるが、藤村が引用している部分を、いまわたくしの手許にある『エミール』のいくつかの版本にあたってみると、藤村の引用と対照したテキストとのあいだに、ちょっとした語句のちがいがみられる。それは、引用の最初の段落の *le meilleur des casuistes* が、対照した十八世紀版その他の版本ではみな *le meilleur de tous les casuistes* となっていることである。どちらにしても意味に変わりはないのだが、なぜこういうちがいがあるのか考えてみる。

些細なことに正確を期する学者は別として、ひとは先人の文章をいつも正確に引用するとはかぎらない。この

程度の書きちがい、あるいは記憶ちがいは、ごくありふれたことにすぎない。まず、こんなふうには片づけてしまうこともできる。

次に、藤村が読んだ『エミール』の版本では、*le meilleur des casuistes* となっていたのではないかと考えられる。十九世紀の版本などにはかなりひどい脱落があるものもあり、こういうちがいは十分生じうるからである。そこで、藤村はどんな版本で『エミール』を読んでいたか。決定的にはなんとも言えないことである。しかし、木曾馬籠の藤村記念堂の図書館には、フランスの旅から藤村が持ち帰ったものとして分類されたフランス語書籍のなかに、ルソーの『告白』（『懺悔録』、ガルニエ版一冊本）、『新エロイズ』（同じくガルニエ版一冊本）、『エミール』（フランマリオン版二冊本）がある。いずれも仮綴の廉価本で、このうち『告白』と『新エロイズ』は終わりまでページを切っており、『エミール』は、第一冊目は終わりまでページを切っているが、「サヴォワの助任司祭の信仰告白」のプロローグではじまっている第二冊目は、初めの部分、三十七ページまでしか切っていない。それに、藤村が引用している断片は、フランマリオン版第

二冊目の三十八ページ、三十九ページ、四十五ページに読まれるのだが、問題の箇所（三十八ページ）はこの版でもやはり *le meilleur de tous les casuistes* となっている。

したがって、もし馬籠の図書館に保存されているフランマリオン版が藤村の読んだ唯一の『エミール』であるとすれば（これはそうむりな仮定ではあるまい）、テキストのちがいということは言えないばかりではなく、藤村はフランス語で『エミール』を通読してはいないし、その一部分である「サヴォワの助任司祭の信仰告白」も通読してはいないことになる。

そこで、第三に、藤村はルソーの断片をだれかほかの人の著作のなかにみつけて、それを書きうつしたのである。要するに、孫引きしているのだ、と考えられるし、これがいちばんもっともらしく思われもする。馬籠の図書館には、ルソーに関するフランス語の書物として、ほかに、エミール・ファゲの『ルソーの生涯』と『思想家ルソー』の二冊がある。このファゲの本をよく見れば、あるいは『飯倉だより』の扉のことばがそのままみだされるかもしれない。しかし、わたくしにはしらべてみる余裕はなかったし、それほどこの問題に興味を感じて

いるわけでもない。藤村がルソーにたいして深い関心をもっていたことは、かれの文章から十分にうかがわれるにしても、かれはたしてルソーをどれほど読んでいたか、それを想像させる材料のひとつとして、右のようなことをしるしたにすぎない。

三

「すべての人を師とするは予の願ひなれば……」こんなことも言っている(一九〇八年、天明愛吉宛の手紙)藤村には、とくにある作家に傾倒していたというようなことはなかったのではないか。かれにもっとも大きな影響をあたえた作家の名をあげるならば、それはおそらく、西欧のどの作家でもなく、少年のころからかれが愛読していた元禄の詩人芭蕉であろう。大ざっぱな言い方をすれば、藤村は、十九世紀から二十世紀にかけての、日本の小市民の生活史を書いた作家である、と規定することができるが、その自伝的な長篇、『春』(一九〇八)『家』(一九一〇)、『桜の実の熟する時』(一九一九)、そしてとくに『新生』(一九一八—一九一九)のような作品の成立に、ルソーの『告白』の影響が感じられるとしても、それについて

てはごく漠然としたことしか言えないのではないか。『新片町より』(一九〇九)に収められた一文(ルウソオの『懺悔』中に見いだしたる自己)に藤村自身書きとめていることのほかに、そう多くのことをつけくわえることはできないのではないか。

藤村はルソーについてそれほど多く語ってはいないし、いちばんまとまっている『新片町より』の文章にしても、五枚たらずの短いものだが、その初めのほうを抜いてみよう。(引用はすべて旧筑摩版島崎藤村全集による。ただし、「ルウソオ」はそれ以前の全集の通りにする。)

「私が初めてルウソオの書〔英訳『告白』〕に接したのは二十三(一八九四)の夏であった。……

私はそのころ、いろいろと艱難をしていた時であった。心も暗かった。で、偶然にもルウソオの書を手にして、熱心に読んで行くうちに、今まで意識せずにいた自分というものを引き出されるような気がした。その以前も外国の文学が好きで、いろいろとあさっていたが、私の目をあけてくれた書籍は何かというに、……このルウソオの書いたものであった。もっともそのころは心も動揺していたし、年も若かったので、『懺悔』を十分に読

んだとは言えなかったが、おぼろげながら、この書を通して、近代人の考え方というものが、私の頭にわかるようになってきて、直接に自然を見ることを教えられ、自分らの行くべき道が多少理解されたような気がした。ルウソオの生涯は、その後長く私の頭に印象せられて、いろいろな煩悶と艱難に対する時、いつも私はそれを力にしていた。……」

こんなふうには藤村は、ルソーに負うところがいかに大きかったかをはっきりとみとめている。ただ、この文章を読んでも、ルソーの思想をかれがどう理解していたかということはあまりよくわからない。ルソーによって教えられた、「近代人の考え方」とはどういうことなのか、ルソーの自然とはどういうことなのか、よくわからないし、あとをつづけて読んでみても、「真に束縛を離れてこの生を見ようとする盛んな精神」とか、ルウソオは「自由に考える人」の父であったとか、そんな程度のことしか書いてないのである。それを読みながら、わたくしは、『破戒』(一九〇七)に出てくる猪子蓮太郎という人物を思い浮かべる。

猪子蓮太郎は、『懺悔録』の著者である。この人は、

自分を離れては話することのできない人である。そして、『破戒』の主人公、瀬川丑松は、この人に手を引かれて、新しい世界に連れて行かれる。こんなふうにつながあわせてみると、丑松はそのまま若き日の藤村であり、蓮太郎はルソーである、と考えてもよさそうな気がする。ところで、わたくしたちは、この猪子蓮太郎という人物が、部落出身の新しい思想家、著述家であることを知っているが、この人はいったいどんな思想の持ち主なのか、それについては大したことはわからない。

「猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の「新しい苦痛」を表わすと言われている。……蓮太郎は貧民、労働者、また新平民などの生活状態を研究して社会の下層を流れる清水に掘りあてるまではずたゆまず努める……。もともと蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面からそういう問題を取り扱わないで、むしろ心理の研究に基礎を置いた。……」(第一章四)

これが猪子蓮太郎の思想傾向についてわたくしたちが知らされるすべてだといっている。

藤村がルソーの思想をどのようにうけいれたかは、具体的によく分らないにしても、かれは、『告白』を初

めて読んだとき、そこに書かれていることに深い共感を覚えたことと想像される。海のかなたに百年以上まえに生きていた思想家とはいえ、わが身にくらべてみることでできるような人の物語をそこにみいだしたのではないかと想像される。ルソーは生まれると同時に母を失った。十歳のときに父と別れた。叔父の家に身を寄せ、寄宿生となり、やがて彫金師の徒弟となり、十六歳のとき故郷を捨てて長い漂泊の生活を送ることになる。藤村の少年時代は、それほどの波瀾に富んだものではなかったにしても、かれも、幼くして故郷をはなれ、早くから世間の波にもまれて成長した人である。たとえば、『告白』に語られている少年期の恋愛経験、また、ルソーの生涯に消えることのない傷痕を残したトリノにおける一事件、リボンを盗んで、その罪を若い娘になすりつけたこと、なども、藤村に自分の過去を思い出させることがあったのではなからうか。かれもまた、幼いころの恋を語っているし、銀座の夜店で、美しい表紙画の草双紙を、ひとごみにまぎれてふところに入れた少年の目の自分の姿を想いうかべてもいる(『春』百二十五)。そんなことを考えてみると、あの『新片町より』の文章の終わり

の一節がいっそうよくわかるような気がする。

「ルウソオの『懺悔』を読むと、いわゆる英雄豪傑の伝記を読むような気がしない。彼の『懺悔』はやはりわれわれと同じように、失望もすれば落胆もする弱い人間の一生の記録だ。多くのエライ人の中で、彼は最もわれらに近いおじさんのような気がする。彼の一生は近づくべからざる修養とも見えない。われらは彼の『懺悔』を開いて、至るところに自己を発見することができる。」

なんの説明も要しない文章のようにみえるが、わたしはあえて、注解をつけた。藤村にとっては、ルソーはやはりエライ人の一人であり、英雄豪傑のたぐいだっただのである。しかもこの人は、われわれと同じような、弱い人間だった。ルソーのこの二つの面を、藤村は、「最もわれらに近いおじさん」ということばで結びつけているのである。わたくしはそんなふうを考える。

ここで、「おじさん」というようなことばを、年長者の権威といったようなものがほとんど失われているわたくしたちの社会の感覚で理解してはなるまい。それは親しみの感じられる人ではあっても、狎れることは許されない人なのだ。少青年時代の藤村にとってもっとも身近

な「おじさん」は、『春』や『桜の実の熟する時』に出てくる「田辺の叔父」、吉村忠道だが、この人は、快活に笑いながらも、武士らしい威厳をもった人だ。さらにこんなこともある。小諸時代に書かれた手紙の一つ（一九〇一年、「明星」編集所宛。『落梅集』についての批評に答えた手紙）のなかで、藤村はこんなことを書いている。「……『寂寥』のうちに於て、高祖を隣家の叔父の如くに取あつかひたるは、殊に罪ゆるされぬ業とさとり申し候……」これで見ると、かれは、高祖、つまり日蓮のような古人も、隣りの叔父さんと考えたわけである。「寂寥」は小諸へ行って間もないころにかなり力を入れて書いたものらしいが、そこには、西行、芭蕉、仏陀、屈原、日蓮、等々の故事がよみこまれている。日蓮を「安房の生れの梅陀羅が子」と呼び、叔父さんあつかいにした藤村は、西行も芭蕉も、仏陀も、屈原も、そう考えていたのかもしれぬ。それらはエライ人であるとともに、かれに親しみを感じさせる人だったのではないか。ルソーはもつとも自分たちに近いと感じられたにしても、やはりそれらの人と同列におかれる人だったのではあるまいか。藤村にとっては、ルソーは主として『告白』の著者で

あったということはまちがいない。『新片町より』の文章のなかで、ルソーが専門の文学者でも哲学者でも教育学者でもなく、「人」として進んでいったこととくに心をひかれると言ひ、「ルウソオは人の一生に革命を起した。」と言っているものの、かれは、のちになつても、『社会契約論』のような書物は読まなかつたらしいし、ルソーのいわゆる「自然にかえれ」も、ありのままに生を見よ、といった漠然たる意味に解するにとどまつて、『社会契約論』や『エミール』に読まれる強烈な社会批評を感じとることはなかつた。

四

三年間のフランスの旅（一九一三—一六）で、藤村は初めてフランス語を学び、あらためてルソーにふれる機会をもつた。

「……岸本は机にむかつた。書架の上から淡黄色な紙表紙の書籍を取り出して来て、自分の心をそのほうへ向けた。そしてわき目もふらずに新しい言葉の世界へ行こうとした。英訳を通して日ごろ親しんでいた書籍の原本を手にするこゝすら彼には楽しかつた。彼はすでに読み

たいと思うか、かずの書籍をもっていたが、おぼつかない彼の語学の知識では多くはまだ書架の飾り物であるにすぎなかった。この国の言葉にこもる陰影の多い感情までも読みうるの日はいつのことかと、もどかしく思われた。〔『新生』第一卷六十五〕

これは『新生』の主人公がパリに来てから一年ほどたったころのことである。パリに来て「一年余は殆んど語学のために費したやうなもの」と藤村は信州の友人にあてた手紙のなかに書いているが、右の引用でみれば、一年たっても、かれにとつては、フランス語の本の多くは書架の飾りにすぎなかったらしい。馬籠の図書館には、そのころ書架におかれていたと思われる、淡黄色やうすい緑色の本が保存されている。現在も一般に知られている作家の名をあげるならば、スタンダール〔『赤と黒』、『バルムの僧院』、『恋愛論』〕、ユイスマンス、メーテルリンク、ジード、モンテルラン、アラン。それに、ルコント・ド・リール訳のホメロス、ソフォクレス、アリストファネス、『戦争と平和』の仏訳本などもある。ルソールについてはすでにしるした通りであるが、ルソールの著作のほかにはファゲの『思想家ルソール』、『ルソールの生涯』な

どを購入しているところからみれば、そのころ藤村は、いくらか念入りにルソールを勉強する気になったこともあるらしい。自分の親しめそうな、すぐれた文学者を選んで、「その人の著作に親しむこと」、「その人に関した批評を読むこと」、「その人の生涯を知ること」、これが文学に志したころのかれの方針で、まずこの方針にそって芭蕉を読んだ、と書いている〔『飯倉だより』〕ことが、思い出されるのである。

この「四十の手習い」がうまくいったかどうかは疑問である。フランスの旅は藤村にとって楽な旅ではなかった。経済的に苦しい旅だった。仕事もかかえていた。おまけに、パリに来て一年後には、戦争の渦中にあつた。ルソール研究を思い立ったとしても、そういう状態でつけられたとは思われないうし、苦しいなかでそれをつづけるほどルソールに熱を入れていたわけでもなかったろう。書物のページが切つてあることは、もちろん、それを讀んだ証拠にはならない。しかし、藤村はパリの客舎で『告白』のすくなくとも初めの部分を読みかえしていたのではないかと思われる。日本に帰ってから、アナトール・フランスの『少年少女』に刺戟されて、子どもたち

のために書いたフランス土産ともいふべき『幼き者に』(一九一七)の二八に、さあ、フランスのおじさんで、ルウソオという人の子供の時の話をしましょう、という書き出しで、『告白』第一巻にある逸話が語られている。

この逸話は、『告白』では幼いルソーがまだ父親とともに暮らしていたときのこととされているのだが、藤村はそれを、自分の少年時代のことのように、「あのフランスのおじさんは、まだ子供の時分に、ある人のうちに世話になっていました。」というふうに語っている。それはとにかくとして、この、子どもたちへの土産話のひとつは、藤村がバリで『告白』を読みかえしていたことを想像させる。

『新エロイズ』についていえば、ルソーのこの小説は、藤村にとつて、二重に興味があったものではないかと思われる。この小説の表題は、いうまでもなく、中世フランスの哲学者アベラールの愛人の名をかりたものだが、このアベラールとエロイズの故事がよみこまれているヴィヨンのバラードを、若き日の藤村は、ロセッチの訳で、友人たちとともに愛誦していた。

「……アベラールとエロイズの愛。何ほど青年時代の

岸本はその奔放な情熱を若い心に想像して見たか知れない。……旅のかばんに入れて国から持って来た本の中には昔を思い出させるイギリスの詩人の詩集もあった。その中にあるアベラールとエロイズの事跡を歌った訳詩の一節をもう一度あけてみた。……

東京下谷の池の端の下宿で、岸本が友だちといっしょにこの詩を愛誦したのは二十年の昔だ。市川、菅、福富、足立、友だちは皆若かった。あの敏感な市川が我と我が身の青春に堪えないかのように、「されど去歳こぞの雪やいづこに」と吟誦して聞かせた時の声はまだ岸本の耳の底にあった。」(『新生』第一巻七十五)

そのアベラールとエロイズの「比翼塚」をペーラー・ラシェーズの墓地に訪ねて、「堂々とまくらをならべて」眠っている男女の寝像を見たときのこと、藤村は感慨深げに語っている。しかし、かれは、アベラールがソルボンヌの先生で坊さんであったこと、エロイズも尼さんであったこと、それくらいのことしかこの古い恋愛譚の主人公たちについて知らなかったらしい。『新生』の第二巻で、岸本は節子にむかってこの二人の恋人たちの話をし、いずれもっと詳しいことがわかったら教えてや

る、と言っているが、その後、しらべてみたのかどうかわからない。

藤村はルソーの『新エロイズ』を、フランスからの帰途、二カ月をついやした船の旅のあいだに読んでゐる。『ジュリー』、または『新エロイズ』は現在のガルニエ版で七百ページを越えるルソーの主著のひとつで、若い二人の悲恋に道徳論が織りこまれてゐる小説だが、この『ジュリー』について、藤村が『海へ』(一九一八)にしていることを読んでみる。

「風のある涼しい甲板の上で、私は旅のかばんの中に入れて来たルウソオの『ジュリー』(またの名、『新しいエロイズ』)を読み始めた。『懺悔録』によってフローベールに感化を与えたというルウソオは、この『新しいエロイズ』によってストリンドベルヒあたりまで影響を与えたのではあるまいか、ということが読んでいくうちにだんだん思われてきた。……」(第四章五)

『告白』にいきなりフローベールをむすびつけたたり、『新エロイズ』に関連してストリンドベルヒの名だけをあげていることは、フランス文学史について初歩的な知識しかもちあわせないわたくしなどにはよくわからない

いのだが、このあとにはルソーについて書いてある。

「近代人の母体とも言うべきあのスイス生まれの天才が何度も後世の人の心に生きかえるということとは、むしろ一つの奇蹟のようにも思われる。……私は自分の青年時代から好きなルウソオがああ薄命なフランスの新進作家シャルル・ルイ・フィリップによって、ベルギーの詩人エルスカンとともに、生前愛し慕われたということにも言いあらわしがたいなつかしみを覚えていた。」(同上)

さらに、こんなことが書いてある。

「御退屈でしょう、などと船員から慰められるたびにかえって迷惑に思っていたほどの私も、今度という今度は海上の無聊に襲われるようになって行った。私にルウソオの『新しいエロイズ』でもなかったら、ほかに時の送りようがないような日もあった。……」(同上、十)

こう言いながらも藤村は、すぐそのあとにつづけて、ボーイから歴史小説みたいなものを借りて、それを二日も三日も読みつづけ、そんな安易なものを読んでゐる自分に嫌悪を感じている。ルソーはやっぱり骨の折れる読書だったのかもしれない。

藤村が読んでいたガルニエ版の部厚い仮綴本は、背が

二つに割れていて、ページのあいだになにか知らない紫色の花がはさんであった、たぶん、藤村自身がはさんでおいたのだろう。しかし、かれはこの小説をどの程度読んでいたのか。それはわからない。なにを読みとったのか。それもわからない。この小説についてかれがしていることは、右に引用した程度のことだけである。いや、もう一つある。もっとも、これはずっとあとの『桃の雫』(一九三六)に書いてあることだ。

「明治維新に対する本居宣長の位置は、あたかもフランス革命に対するルウソオの位置に似ている。彼に『ヌーヴェル・エロイズがあれば、これに物のあわれの説があり、恋愛の説があるのにも似ている。……』」

ここでは、藤村は、『夜明け前』の作者らしく、「フランス革命に対するルウソオ」といった文句をつかうようになっていくが、同時に、『社会契約論』の著者を『直隕』の著者にくらべ、十八世紀のヨーロッパを感動させた作品を、物のあわれの説にくらべているのである。

結局、藤村がフランスの旅にあったころ、どれほどルソーに親しんだかはよくわからないにしても、ルソーにたいして青年時代からもっていた関心を、このころもも

ちつづけていた、あるいは深めたといえるだろう。そして、その深い関心はその後も何年かのあいだ失われることはなかったと思われる。『飯倉だより』の扉のことはもその証拠のひとつと考えられる。

五

『飯倉だより』に収められたエッセイは一九一八年から二二年までのあいだに発表されたもので、一部分は『新生』執筆の時期に書かれたものである。それは藤村が飯倉の谷間の家の書斎で、夏の日には、「熱い汗と冷たい汗を流しつづけていた」ころだ。

『新生』第二巻の結末に近い部分には、しきりと「懺悔」という文句が出てくる。以下、その部分を断片的に引用してみる。

「四年の間自己の秘密を隠しに隠そうとした岸本の心にも、ようやくその時になってある転機がきざして来た。……」

「いっさいをみんなの前に白状したら。」

岸本は今まで聞いたことのない声を自分の耳の底で聞きつけた。もしうそでかためた自分の生活を根からくつ

がえし、暗いところにある自分の苦しい心を明るく持ち出し、いい事も悪い事も何もかも公衆の前に白状して、これが自分だ、捨吉だ、と言うことができたなら……」

この一節の最後のところは、ルソーの『告白』の初めである次のようなこととは対照させることができる。

……Je dirai hautement: voilà ce j'ai fait, ce que j'ai pensé, ce que je fus. J'ai dit le bien et le mal avec la même franchise……(……わたしははっきりと言おう。

これがわたしのしたことだ。考えたことだ。これがあった通りのわたしだ。わたしはよいことも悪いことも同じように率直に語った。……)

抜き書きをつづける。

「……彼は躊躇しないわけにはいかなかった。自己の破壊にも等しい懺悔……その結果が自分に及ぼす影響の恐ろしさと思うと、なおさら躊躇しないわけにはいかなかった。……」

「まだ岸本はいっさいをそこへさらけ出してしまおうほどの決心もつきかねていたが……どうしてもその心の声を否むことができなかった。それをするには、いろいろ

な人が懺悔を書いた例にならって、自分も愚かしい著作の形でそれを世間に公にしようと考えるようになった。……「あの事」を書いたら。そんなことは……以前の彼の目から見たら、まるで狂気の沙汰であった。……」

「懺悔へ。岸本はどうしてこんな心になれたらうと時々自分ながらびっくりすることがあった。彼の心がそのほうに向かおうとしただけでも、なんとなく彼の歩いて行く道には新しい未来が感じられてきた。……もし懺悔を書く日が来たら。それを思うと彼はもっとよく自分の心に聞いてみなければならなかった。」(以上、『新生』第二卷九十二―九十三)

「よく自分の心に聞いてみなければならなかった。」——これはありふれた文句にすぎないにしても、『飯倉だより』の扉のことばの最初の文句を思い出させる。Je n'ai qu'à me consulter sur ce que je veux faire. (わたしは自分がしたいと思っていることについて自分の心にきいてみるだけでいい。)

のちに藤村がなんと書いていようと、『新生』は告白の小説である。しかし、その内容からすれば、それはむしろ、ルソーの『新エロイズ』とはまるでちがった、

藤村の『新エロイズ』と考えることもできる。妻を失い、文学生活にも行きづまりを感じた中年の男が、身近な若い娘と過ちを犯す。その罪を隠すために、故国を離れ、遠い異郷で苦行者のような生活を送る。三年後、故国に帰ってきた男は、同じ過ちをくりかえし、やがては、その過ちから生まれた恋愛を肯定することになる。

『新生』はこんな筋の作品だが、これはあのアペラールとエロイズの世界に似た暗い世界を感じさせる。アペラールとエロイズの出会いは一八一年、アペラールが三十九歳、エロイズが十七歳のときと伝えられているが、アペラールは学名高い修道士、エロイズはその教え子。二人のあいだには一人の子が生まれた。しかし二人は暴力的に仲をひきさかれ、エロイズは修道院にはいる。——『新生』の岸本と節子との関係には、フランス中世の半ば伝統的な恋愛譚の主人公たちに似通ったものが感じられる。

『新生』の発表は、まさに「狂気の沙汰」だったといえよう。しかし、その発表は狂気の沙汰だったとしても、この作品は作家藤村にとって必然だったといえる。それはかれがあくまでレアリテを追求する写真家だった

からではない。かれは本質的に詩人だったのである。『新生』はとくに詩人の小説である。また、右の断片的な引用からもうかがわれるように、藤村が「煩悶や艱難に対する時、いつも力にしていた」ルソーの影響がそこにつよくはたらいていたことはたしかである。そして、『新生』を書いたころ、*Tout ce que je sens être bien est bien……*（わたしがよいと感じることはよいことなのだ……）と教えるサヴォワの助任司祭の声が藤村の耳の底に聞こえていたのではないかとわたくしは想像する。

六

明治二十年代に文学に志した藤村は、長いあいだ政治に全く背をむけていた。かれがそういう自分を反省しはじめたのは、パリにあって戦争に際会したときだが、そのときかれをつよく刺戟したのは、シャルル・モリスやモリス・パレスのような右翼の作家たちだった（『戦争とパリ』一九一五）。こうした国家主義者に藤村が感激したのは、ひとつにはかれが長いあいだ政治に無関心だったことの結果にほかならないといえるし、フランスにあって、フランス人の幾多の愛国的な情景に共感をもったか

らでもあろう。しかし、国家主義への共感は、一般的に
 いて、藤村の世代の日本人の宿命だったのである。か
 れらはたえず、われわれに対立するものとしてヨーロッ
 パを意識し、西欧の文化をうけいれながらも、いかにし
 て西欧の現実の侵略からわれわれの独立と文化を守るべ
 きかという課題をたえず念頭におかなければならなかつ
 た。藤村も日本をはなれ、ヨーロッパの現実にふれて、
 そういう対立意識をつよくひきだされたのである。同時
 に、十年ちかく自己のささやかな歴史を書きつづけてき
 たかれは、四十歳を過ぎて、若いころにはそれほどにも
 思っていなかった自分の父のことを考えるようになって
 いた。青山半蔵の物語は、『新生』以前に藤村の脳裡にひ
 らめいていたということが出来る。

その物語は木曾路のはずれにある小さな宿駅を主な舞
 台としながらも、それまで藤村の作品にみられなかった
 大きな歴史的背景をもつ作品として完成された。そのと
 き『新生』はすでに遠い過去の物語となっていた。しか
 しながら、「すべてのものは過ぎ去りつつある。その中
 にあって多少なりとも『まこと』を残すものこそ、真に
 過ぎ去るものと言ふべきである。」(『飯倉だより』)と『新

生』の時期に書きつけている藤村は、結局、一片の「ま
 こと」のうちに青山半蔵の悲劇に救いをもたらすものを
 見ていたのである。

この青山半蔵の物語、『夜明け前』の第二部下巻で、藤
 村はもういちどルソーを思い出している。明治十年代の
 ことを語っている一節である。

「……幾多の欠陥が社会に伏在すればこそ、天賦人權
 の新説も頭を持ち上げ、ヨーロッパ人の中に生まれた自
 由の理を喧伝せられ、民約論のたぐいまで紹介せられ
 て、福沢諭吉、板垣退助、植木枝盛、馬場辰猪、中江篤
 介らの人たちが思い思いに、あるいは文明の急務を説
 き、あるいは民権の思想を鼓吹し、あるいは国会の開設
 の必要を唱うるに至った。真智なしには権利の説の是非
 も定めがたく、海の東西にある諸思想の区別をも見きわ
 めがたい……物を教える人がめっきり多くなって、しか
 も学ぶに難い世の中になってきた。良心あるものはその
 声に聞いて道をたどるほかはなかつたのである。」(傍点
 引用者)

これが書かれたのは一九三五年春で、わたくしたちに
 とって一八六七年にはじまった一つの長い時代が終わり

に近づきつつあったところである。歴史の激しい流れに直面したとき、「誠実」や「良心」がいかに無力であるかを、わたくしたちは、青山半蔵の生涯を読むまでもなく、十分に教えられていたはずである。

しかし、『飯倉だより』の扉のことばも、ルソーの仕事全体の文脈のなかにおいてみるならば、小市民のその日ぐらしの道徳律とはまるでちがった意味をもつことにな

る。ルソーにおける良心の權威の確立は、一方において、特権階級の強力な支えとなっていた伝統的宗教の權威を否定し、他方において、自己を民衆と区別する「知識人」の哲学を拒否しているのである。それは一切の社会的不平等にたいする、いまなおつづけられている戦いの一環をなしていたのである。

(一九六六・一一・二二)(一橋大学非常勤講師)